書評に応えて

波　平　勇　夫

拙著『近代初期南島の地主層—近代への移行期研究—』は、これまで例のない風変わりな書評に巡り会った。沖縄タイムス紙への書評依頼を除いて他に要請したことはないから、今回改めて書評を書く背景には評者の並々ならぬ強い関心があろう。その点、評者の意を多としなければならない。しかも全11章のうち「序」、「一章」、「二章」について各章および各節ごとに文章を追って論ずる手法には尋常ならざる気遣いを感じる。

評者の指摘は、形容詞「著しい」の使い方、表現法「半壊」と「全壊」の区別、図表の表示法などから時代区分に至る多方面に及ぶものであるが、ここでは批判の中心と思われる「近代」の歴史認識を中心に応えたい。なおここで使用する書評原文は、評者が今年(2000年)2月に「『南島文化』の次号に掲載予定」と銘打って各研究室に配布したものである。まず順序として書評とは何かを問い、続いて指摘されている「問題」について釈明したい。

書評とは、通常、著書のテーマが何であり、そのテーマがどのように解明されているかを紹介した上で、批判点があればテーマの設定レベルあるいは解明レベルで指摘されるものである。重要な点は研究のシェーマが何であり、その中から特定されたテーマが何であるかということの提示である。それらは研究の文脈と称してよい。取り上げられた資料や用語さえも、その文脈で語られなければならない。文脈を離れた用語や文章、資料はテーマとは別の意味世界を構成することもできる。

書評は著者と評者の二者間に限られた意味伝達の世界を越えて、読者を含めた三者間の意味世界を構築するものでなければならない。それは相互に刺激しあう関係であり、創造の世界にもなる。その意味で著書の正確な内容紹介が必要となる。とくにこれから読もうという予定された読者にとってそれが要求される。書評はそのような社会的使命を背負っている。それができなければ書評を引き受けるべきではない。

ところで拙著に対する今回の書評は、このような通常的なものではなく、評者の独自な問題意識から派生した「問題」点を一つ一つ取り立て、それを評者の認識枠に沿って文章化したものである。そこに描写された意味の世界は原著の文脈からかけ離れた、評者の作り上げた「問題」の世界であり、原著から遊離してひとり歩きする独自の世界となっている。それは著者にとって心外であり、原著にとっては不幸な出会いであり、読者にとっては無視以外の何ものでもない。書評は単なる論争や著者—評者間の二者間世界を越えた社会的使命があるはずである。

本論に入る。まず近代に関する著者の論点はこうである。われわれは「近代」や「近代化」についてよく語るのだが、近代の概念は必ずしも明確でない。明治維新や廃藩置県を以て日本における近代の画期とすることは限定的でしかない。沖縄県の場合、県政移行後も土地制度をはじめとして諸制度は明治36（1903）年まで旧慣のままであったことを考えると、明治36年を以

て沖縄における近代社会への転換点とみるのも合理的だし、筆者もその立場をとっている。ただし、法制度改革は社会の一面に過ぎず、一晩にして社会全体が前近代社会から近代社会へ急転換したのではなく、近代社会に先立つ移行期があるはずである。それは近代社会に特徴的な「諸相」の表出で示される。社会変動はすべての制度が同時に急転換することはなく（制度の急転換は革命とも称されるが、同時的な総合的革命はこれまでの人類の歴史にはなかった）、新旧二つの制度が同居することで制度間に不均衡を生みだし、時代要請に合わないものは消滅していく。近代化過程とはそのような社会変動のことである。

沖縄の近代をとらえる場合にも、このような視点が要請される。明治36年を沖縄における近代期の画期とするのは合理的だが、社会変動論からみるとそれはまだ便宜的でしかない。そこで限定的ではあるが近代社会に特徴的な諸相を社会、経済、文化のレベルで示した上で、それら諸相のいくつかは明治36年以前の沖縄社会にも追跡できるとした上で、その一つとして農民的地主の形成を取り上げた。なぜこの階層形成が近代の諸相を表示する指標となりうるかについては、それまでの領主的土地所有制度との制度的矛盾、商品経済の発達との連動を示した。もう少し補足すれば、これら新しい地主層の農業経営法にも求められる。時代的限定をしなければならないが、彼らは農業、商業、工業、金融業などの複合経営を特徴とする農村起業家でもあった（その組み合わせは一様でないが）。そして拙著のタイトルである『近代初期南島の地主層—近代への移行期研究—』の解説として、近代初期とは18世紀後半から19世紀をさすとした。これは近代の諸相からみた時代認識であることはいうまでもない。

これに対して、評者は沖縄を代表する歴史家の諸説を援用しつつ、「真の近世の始まりが『近代』の始まりとされる」と批判する。そもそも評者に歴史センスがあるのかどうか疑いたくなる。まず「近世」「近代」とを全く異質の時代ととらえているようである。もちろん経済制度や政治制度からみて両者が同じととらえる人はいない。ここで問題にしているのは時代的な連続面である。時代区分は非連続面が特定できて成立するものであるが、その非連続性は相対的なものであり、理念型的なものである。なによりも非連続面によって連続面を等閑視するような教科書的見解は学校教育レベルのものであり、研究者レベルのものではない。とくに移行期と思われる時期には新旧制度が共存することは疑う余地はない。英語で近世はearly modernであり、近代はmodernであることも考えてみよう。アメリカの日本研究者にとって徳川時代と明治維新以降の日本は別世界としてではなく、近代化過程では連続的にとらえられているのが常識である。

時代区分と関連してもう一つ注意を喚起しておきたい。それは科学方法論における定義の問題である。方法論的には全く初歩的なものであり、憚るところであるがやむを得ない。定義には構成的定義（constitutive definition）と操作的定義（operational definition）がある。構成的定義はその用語を意味領域を構成する要素から規定する方法であるが、その要素が特定しにくいか、要素の広がり（範囲）の境界が明確にできないと、定義は不十分なものとなる。「近代」やもう一つ問題として指摘されている「封建制」などの定義は構成的定義の例であるが、定義の一致は困難である。そこで権威にすがったりする。操作的定義はある目的のために意図的あ

るいは任意的に使用されるものである。例えば沖縄の近代の画期を明治36年とするのは、この方法に近い。構成的定義と操作的定義が一致すればよいが、前者ではデータ処理やテーマの限定が不明確になる場合が多いため、その限定的用法として後者（操作的定義）を使用したりする。拙著で、「本書で意味する近代初期とは、沖縄における農民的地主が目立ってくる一八世紀後半から一九世紀をさしている」（拙著、２頁）は操作的定義である。こうした定義上の原則を評者は理解しているだろうか。近代初期に関して、「その視点は限りなく遡っていく」とか、「『開墾がなされれば即近代』という認識のようにみえる」というのは評者の理解の限界でしかない。また書評の中で評者は、「著者は18世紀後半から『近代』だとし、そのころから身分制度は『崩壊』しているとして『近代』の始期を限りなく早めていて、そのために『廃藩置県』以前と以後をともに『近代』として同一視してしまい、自らが以前を論じているのか、以後を論じているのか、分からなくなっているのである」と述べているのも、拙著を読みこなしていないか、評者の理解の仕方に問題があるか、たぶん両方である。

定義に関していえば、著者は神経質なくらい重要な学術用語には注意している。特にテーマと関わるキーワードはそうである。ただ論文のなかで使用される用語や学術用語でも通常的に使われているものや、テーマの周辺的な位置を占めているものは心のゆるみがあるかも知れない。拙著のように約20年間に書かれた論集となれば、用語の統一で不備な点もあろう。たとえば、拙著所収のある論文ではテーマとの関わりで細心の注意が払われていても、他の論文ではそのような扱いをしていないこともある。評者は「地主」の意味が誤っているというが、それは全章を読まない軽率な誤解である。

「士族と対比されるべきは農民層ではなく、百姓ではないか」ともいう。評者はここでも二つの誤りをおかしている。士族は正しくは、明治２年以降、藩士・官待・公卿侍・寺侍・神官・旧幕臣などに与えられた称号であり、近代以降の身分称号である。その限りでは農民層と並列されてよい。他方、評者が近世という時代認識に立っての話なら、農業を生業とする人びとの身分呼称は百姓が一般的であるが、今日の段階で百姓と農民を互換的に使って誤りではない。農業は生業として連続しているからである。(仮にある時代に固有な職業的身分はそれをそのまま使用する以外にはない。)たとえば東京帝国大学国史学科出身の児玉幸多氏（学習院大学名誉教授）のロングセラーとして知られる著書『近世農民生活史』（昭和32、吉川弘文館、27刷＝平10年）があることを評者は気付いているだろうか。

「近代」の時代認識の問題に加えて、もう一つ評者が陥っている方法論上の課題を指摘しておきたい。それは日本史と琉球史の交差の問題である。沖縄研究者がそれぞれの分野で琉球（または南島）に個性的な歴史的、社会的、文化的現象や現象間の諸関係を追求することは当然であり、そこにこそ琉球を研究する意義もあろう。しかし固有なものを求めるあまり、日琉間の交渉史を軽視すべきではない。むしろ日本史のなかで琉球史を追求することも正当な方法である。琉球の士族を語るのに「日本史」の士族を論じて何の意味があるかという姿勢には同意しかねる。日本史と琉球史の二つの歴史は別々のコースをたどったとでもいいたいようだが、他方、士族没落の原因は旧身分制、「禄」や役棒の廃止にもとづくもので、これは日本全国同じで

あったと述べるような非一貫的論点をどう評価したらよいだろうか。それ以上に驚くべきことは、没落につながるほど禄が保障されていた士族は旧身分層の限られた一部に過ぎなかったことに対する誤った認識である。

批判点のもう一つは先行研究の扱い方である。「先行研究とのかみ合わせが無く、著者自らの『見解』をただ書き連ねているだけ」という指摘は誹謗中傷としかいいようがない。多少なりとも研究の前進に期待をかけている研究者が先行研究を無視できようか。先行研究とのかみ合わせが無いという場合、その先行研究とは何をさしているだろうか。拙著ではテーマと関係すると思われるもので、入手できるものはほとんど目を通したつもりである。もちろん、目の届かなかったものがあったことは予想できるし、それは個人の能力を越えているからやむを得ない。目を通したもので、理論的枠組みの領域外のものは当然はずされる。もちろん批判の対象として組み込むことはできないことはないが、これは必須条件ではない。要はどのフレームを使った方が社会や歴史を的確にしかも説得力をもって分析できるかということだから、先行研究の選択はそこで決まってくる。先行研究のうちどれが生き残り、どれが淘汰されるかは後続する研究者が決めることであって、古典（これの形成過程も注意が必要であるが）でもないかぎり、特定のものを強要することはできない。研究はそれぞれ何らかのフレームを有しており、それを踏襲するかどうかは研究の目的と関わる重要な選択となる。機械的踏襲はそれの再生産になっても、それを脱した創造的研究成果は期待できない。再生産はへたをすると、権威主義の温床となる。そうなると研究は外装的営為にとどまって、創造という本来の姿から遊離し、副産物だけ残す。それは本来の意味の研究の終焉を意味する。もし評者が特定の先行研究を念頭に置いているとすれば、それは全くの論外のことである。先行研究の選択は、研究者にまかされた重要な作業過程の一つであり、研究者本人以外のものが意中の特定研究を参考にしたかどうかで研究成果を評価しようとすることは、おこがましいことであり、研究者の良心に背く。仮説の世界で生きている研究者は謙虚でなければならない。

評者は拙著に対して異常なほどの情熱をもって批判しているつもりのようだが、勢い余って内容を読み込んでいないため、その批判は的はずれなものになっている。しかも「士族は身分であり、支配層は階級である」（後半が問題）とか、「士族は前近代の身分を表す用語で、農民層は近代以降の階級」という珍説まで披露する。

評者は結びとして、「本書は歴史研究として何ものもつけ加えなかった」という。時代区分を教科書的レベルで理解している教条主義的歴史認識では拙著は理解できまい。書評という名の今回の珍評は歴史センスの貧困が生みだしたものである。しかも書評を急ぐあまり、11章のうち残り９章を読まないままの結論だから、恐れ入るばかりである。どうも評者も著者も専門の歴史家ではないという点で隣り合わせのようである。今後大いに議論していく位置にあるかも知れない。急に多忙な職務に就いてしまい、意を尽くしたリプライになっていないが、いつの日かもっと包括的な対応を試みたい。